

組織計画の哲学と産業主義

— 組織論史覚書 (I) サン・シモン —

塩 原 勉

I 問題発見のための重点組織論史

一括して「組織論」とよばれているものの多様な領域と方法論を、体系的にくみなおすためには、問題発見的な整理がまず必要になろう。そこから、組織論史への関心がうまれるわけであるが、かりに近代以降に限っても、組織論のたねんな通史を書くことは非常にむずかしいし、労力のわりにその意義も疑わしい。したがって、本稿を皮切りとする組織論史の覚書では、problematischな重点主義をとることにしたい。

おもに社会学の分野で、現在の組織論に甚大な影響をあたえており、方法論上、いくつかの系譜で代表的な位置をしめている理論であること、そして、各時代相を知識社会的によく反映している理論であることを、一応のめやすにして、重点的な組織論史のおおざっぱな見通しをたてると、つぎのような区分が可能かもしれない。以下の諸理論のあいだの合致と対立、継承と断絶、統合と分岐のヴァリエーションを明細にすることは、問題発見史としては、重要な目標のひとつになろう。

I 組織計画の哲学。19世紀初期にサン・シモンらによって近代的組織観の礎石がすえられた。その内容はまさに哲学であったが、さまざまな諸思想の萌芽をふくんでいた。それゆえ、組織論史はこの検討からはじまる。

II 組織の有機体理論。「国王の誤り」としての反動と、「人民の誤り」としての革命を排除する、コントの有機秩序と進歩の観念がここでは重要である。

III 組織の弁証法。経済的実在の客観的な法則

と、それを契機とする革命の組織化にかんするマルクス理論、レーニン理論、さらにその後の上部構造の修正理論をふくめて、マルクス主義組織論の論理構造は徹底的に再検討されねばならない。

IV 組織的分業の理論。とくにデュルケムにおける有機的連帯とアノミー、異方向の社会諸力間の均衡と価値の問題は、視野のひろい組織論をつくるばあい不可欠であるし、彼の提案する自治的職業団体論はなお考慮に値する。他にスミスとジンメルも問題になる。

V 組織の官僚制理論。ウェーバーの官僚制の問題ばかりでなく、彼のこころみたエトスおよび支配の構造論 ぜんたいが再吟味される必要がある。

1920年前後までは、名だたる巨匠を選びさえすれば、それが直ちに重点主義組織論史の骨組になりえたが、その後、専門分化によって、組織論は精密化とひきかえに分断狭小化されてきた。しかし同時に、専門分化を前提した「統合科学」化への努力が、反流として強まっていることを高く評価しなければならない。巨匠たちの業績の分化や再統合によって、そしてまた、ある部分の見落としや忘却によって、現在の組織論にはつぎのものが加えられた。

VI 組織変形の理論。

VII 組織の機能理論。

VIII 組織の数学モデル。

IX 組織計画の科学。

さいごの組織計画の科学はまだ未来形でしか語られえない。希望的にいえば、それは組織論史の遺産をどん欲に吸収して、科学的認識と政策とを、組織計画および実践のなかで統一するようなもの

になるだろう。かってサン・シモンが実証科学にもとづいて社会計画を意図して果しえなかったものが、今日ようやく実現可能性の域に近づいてきたといえるかもしれない。彼とわれわれの間には一世紀半の歴史的時局と、ⅡからⅧにいたる諸理論がよこたわっている。〈組織計画の哲学〉とは一体いかなるものであったか。この本題にはいる前に、サン・シモンをとくに選んだ意義について触れておきたい。

サン・シモンは名前のわりによく知られていない。およそデカルト的明晰を欠く断片的な論述と常識をこえた——だがフーリエ的狂気とは異なる——彼の諸見解が、接近をはばんできた。そのうえ、『共産党宣言』で彼の思想が〈批判的＝空想的社会主義〉という規定を蒙っている、今日でもこの規定で彼は片づけられているし、また社会学史のうえで創始者コントと不仲な師匠だったと記憶されているにすぎない。しかし、じつは19世紀思想ぜんたいへの彼の意義は大きく、さらに現代に対しても、天才の構想力のみがもちうる隔世的 actualité を示しているのである。これから述べるように、彼の思想にふくまれている実証主義、歴史主義、社会主義、管理主義、政治学、国際組織論、道徳宗教論など、すべては《産業主義》 industrialisme という根本の考えから生じたもので、そこに、組織計画の哲学の由来もある。サン・シモンの死後になって、いくつもの思想や学問的関心に分岐し対立してゆくものの諸萌芽が、彼の独創性のなかで一つになっていったということ、これがわれわれの興味をひく。彼なりの統合の論理を検討することが、問題発見史の一発目として、サン・シモンをとりあげた有力な一理由なのである。

Ⅱ 実証主義と歴史主義

サン・シモンの諸著作（末尾のリストを参照）は、前期の哲学研究と後期の社会研究とからなる。いいかえれば、観念と制度の研究からなる。両者は別べつのものではない。なぜなら、彼の学説を一貫している基本的な考えは、「制度は活動中の観念」のことであり、「組織とは社会

秩序にかんする一般的観念の特殊的適用である」（3, p. 18）ということだったからである。制度は観念の適用だとみる以上、制度の混乱を収束し危機を克服するには、新しい統一的観念が必要となるであろう。こうして、19世紀において必要な統一的観念が〈実証主義〉として表明されたのである。サン・シモンによると、観念進歩の至上法則は、多神教→一神教→形而上学→実証主義という段階をもって示される。これはコントの三段階法則のさきがけであったことは明らかである¹⁾。

実証主義とは、自然・人間・社会のあらゆる領域に同一の科学的方法を適用することを意味している。サン・シモンのばあい、完全にア・プリオリに演繹的な形で全知識が統一されることが望まれた。そして、人間と社会の科学が物理学から導出されることによって、実証的になりうると考えられた。物理主義である。したがって、ニュートンの運動法則は全科学の究極目標のシンボルであり²⁾、カルテジアン風に「数学は一般体系の構成に用いられうる唯一の素材をふくむ」（1, p. 40）と考えられていた³⁾。要するに、人間科学は物理学に準じて構成されることになる。彼の比喩によれば、宇宙は巨大な時計であって、人間はそこから運動をうけとっている小さな懐中時計のようなもので、上位の体系に適用される方法は、下位の体系にも適用されるはずであった。ここで注意してよいことは、物理主義を軸にして、サン・シモンが上位体系と下位体系のあいだの機能的関係を自覚していたことである。彼はいう、「社会は、究極目標と無関係に個人の自由意志や偶発事由でのみ動くような諸生活体のたんなる集塊ではない。逆に、社会は組織されたマシーンであって、そのすべての部分は全体の運動にさまざまな仕方で貢献している。人びとの集合は一つの真の存在をなして、その存続は、構成部分のみならず託された諸機能をどの程度に規則正しく遂行するかによって、確実になったり気紛れになったりする」（10, p. 177）。もしサン・シモンが古典力学の方法を固執して、社会の諸部分の相互作用を分析していったとすれば、おそらく彼は構造機能分析の原初的定式化に達したかもしれない。しかし、彼の

このみは、定時点の構造分析よりは、長期変動分析にあった。彼じしんは実証社会学の方法と歴史的方法がつねに相補的だと信じていたが⁴⁾、後者に関心をもっていたのである。その理由は、彼が自分の能力をわきまえて、1813年以後、古典力学的シンテーゼの試みを中止したことにもあるが、問題は彼の時代的背景のなかにあった。

マークハムが指摘するように、サン・シモンの思想形成は、「啓蒙主義運動が浪漫主義と宗教的復古の運動によって挑戦をうけつつあった世紀の転回点において」(14, p. xxviii)であった。このことは、王政復古期に、なぜ彼がリベラル・ブルジョワジーと反革命とに片足づつ入れていたかの説明にもなる。つまり、彼は啓蒙主義と復古主義の双方から影響をうけ、それらを彼なりに実証主義と歴史主義とに定着させたのである。

I 実証主義。少年サン・シモンの家庭教師であったダランベールやコンドルセらの啓蒙主義者あるいは *Idéologues* は、カントの批判哲学を歓迎し、科学研究につよく貢献したが、サン・シモンの実証主義は同時代の科学サークルの願望を熱狂的に表現したものであった。同時にまた、コントにさきがけて、彼は、増大する特殊科学の狭い専門化と、形而上学の形式的・一般性とのあいだに統合の余地をみいだして実証哲学を構想したのである。

II 歴史主義。革命的破壊性への貶価と中世の積極的評価において、彼は啓蒙主義から遠去かりロマン的、復古的なものの影響をうけた。ただし彼はボナール流の復古テオクラシー派に賛成はできなかった。この面での彼の本領は、コンドルセの進歩史観——これからの影響は絶大だったが——に対して、歴史的発展の真の意味を開いたことにあった。一言でいえば歴史主義である。ランケ的な意味と、最近ポッパーの規定にみるような意味とにおいて、ともに歴史主義であった。しからば、サン・シモンのみる歴史的発展とはどんなものであったろうか。

彼にとって、歴史は絶対の必然性をもって進展する非人格的なものだった。「人間精神進歩の至上法則はすすみ、万事を支配する。人間はただその道具にすぎない」(6, p. 119)。人はその法則を

変えることも、またその影響力から免れることもできない。だから、「われわれの意図は、事物の不可避の進行をうながし説明することではかない。われわれが欲するのは、今後それを承知のうえで、従来は緩慢、不決断、非能率にしか行われなかったものを、よく指導された有効な努力でもって為しとげることなのである」(5, vol. 18, p. 166)。解体した旧制度はふたたび回復することはありえないが、「事物の自然なコースは、社会体のそれぞれの時代に必要な諸制度をつくりだしてきた」(11, p. 30)ということ、いかえれば、各時代は発展の本質的な一段階をなして、前代はつねに後代の不可欠な先行者であるということが理解されねばならない。ランケの徹底性はないにしても、これは歴史主義の本音である。かくして、未来を見るためには過去を見るべきである。短期の現在しか見ない者がどうして「消滅しつつある過去の残滓と、興隆しつつある未来の種子」とを区別しえようか。自分の見解を論証するときサン・シモンがつねに歴史研究によって、観念の進展とその観念を担う諸階級の盛衰交替を分析したのは、このためであった。たしかに〈観念の進歩〉を力説するとき、彼はマルクスの対極にたっている。だが、個人意志から独立の予見可能・不可避の法則によって歴史を把握し、階級の盛衰と関連してそれをみると、彼がマルクスを思想的に準備したことは疑いえない。

それにしても、実証主義と歴史主義という二つの方法が、サン・シモンの変動分析でどう結びついたのであろうか。

注 1) 社会学の創始者をコントではなく、サン・シモンと考えるべき点がおおい。「コントの精神的相続人」と評されたデュルケム自身が、サン・シモンに軍配をあげている。(13, p. 142)。最近、田中清助氏が労働社会学の系譜の起点にサン・シモンをすえて、サン・シモンかコントかによって、社会学そのものの性格に重大な違いが出ることを指摘している(17, p. 63)。筆者もその点に賛成する。

2) 『ジュネーヴ人の手紙』では、指導集団として科学者よりなる〈ニュートン協議会〉を提案するほど、彼はニュートンに執着していた。

3) これに対してコントは「社会科学を実証的にするために、それを数学の応用として扱う考えは、数学以外に真の確実性はないとする形而上学的前

提から生ずる」(8, vol. 38, p. 178) と批判する。問題は科学的方法にあるというわけだ。

- 4) 彼の秘書・協同者・弟子だった二人のうち、チェリーは歴史的方法をつぎ、コントは実証的方法をついで分岐してゆく。

Ⅲ 移行の論理

封建制の内部から、精密科学と自治コンミュニの発達とともに、産業者の階級が形成され、しだいに強力な自律性をかくとくしてきた。ふるい社会はそれ自体の内部に新しい種子を包含していて、ふるい社会が解体してゆく間に、いま一つの新しい社会が形成されるのである。サン・シモンはいう、「地上のあらゆる民族は、同じ一つの目標に向っている。その向う目標というのは、**支配的・封建的・軍事的**の制度から、**管理的・産業的・平和的**の制度に移るといふ目標である。……各民族は、それに特有の歩みをとってきた。そのおのおのは、この目標に達するための特殊な道を打開した」(8, pp. 45-46)。ところが、二つの体系はそれぞれに統合原理がちがっているので、共通の一つの目標で結合することはできない。敵対的で排他的である。したがって、ながくはげしい危機をとおって各国民は独自の途をたどるにせよ、所詮は「封建的体制の完全廃棄と産業的体制の排他的樹立とが不可避となるう」(ibid, p. 39)。

そのばあい、移行にはなんらかの過渡的媒介がなければならない。この媒介は〈形而上学的・法曹的体系〉によって果される、とサン・シモンは観察した。担い手は形而上学者と法律家のグループであり、彼らは大革命のみぎり国民議会議を占めて、おおきな貢献をした。しかし、彼らは批判的ではあっても建設的ではない。産業体系はとても複雑なもので、時と場所によっては柔軟なちがいをみせねばならないが、法とは本来その安定性において過去のなものであるからだ。それゆえ、サン・シモンは、危機が新しい組織化を準備することを認めつつ、「18世紀の哲学は critique で révolutionnaire であつたが、19世紀の哲学は inventive で organisatrice なものになるう」(Sur l'Encyclop.die, O. C., vol. 15, p. 92) と誌したのである。〈神学的・封建的体系〉――→〈形

而上学的・法曹的体系〉――→〈実証的・産業的体系〉という彼のシェーマは、うえのような意味で解されねばならない。

ここで考え直してみよう。よし法曹的体系に媒介されたとしても、はたして移行は解決されるだろうか。制度とは変容しうるものであるか。彼によれば、「制度もこれを創る人間も変えることはできるが、それらの性質を奪うことは決してできない。その元の性格を完全になくせるものではないのである」(8, p. 15)。要するに、制度は一定限度内でしか変容されえないのに、ふるい体系と新しく発達しつつある体系との二つの原理は対立して共存している。これは危機の根本原因である。それゆえ、細部修正は一時しのぎであつて、抜本の解決にはなるまいから、結局のところ、対立する原理の二者択一しかないことになる。媒介的体系を通じて、新生のために死がなければならない。しかしながら、産業体系はいまだ部分的にしか存在していないのだから、それをトータルに存在させるには、発明が必要である。「明らかかなことは、産業制度は、偶然によつても、またありきたりによつても、これを招来することはできない。それは先行的ア・プリオリに構成され、したがって全体として創案するべきで、しかる後にそれを実行に移す、ということである」(ibid, p. 28) まさしくこれが、サン・シモンのいう19世紀の《発明的・組織的な計画の哲学》がになう意義なのである。この計画性において、ふるい観念および制度と新しい観念および制度との間に、断絶がおかれる。デュルケームが『社会主義論』で指摘するように、未来の構成のために過去を白紙にしあるべきものとあるものとの間に両立性がないとみる考え方は、社会主義理論に共通の一般傾向とみてよいであろう(13, p.171)。サン・シモンの計画的断絶の発想は、やはり歴史決定論的にラディカルである、と同時に、計画性と歴史決定性のあいだに残る重要な問題はなお未解決のままにされた。

念をおすまでもなく、計画としての移行と事実としての移行とははっきり区別されねばならない。

階級対立の未発達な幼年期に出現した空想社会

主義者たちでは、とマルクスは語りだす、「社会的活動のかわりに彼らの個人的に工夫する活動が、解放の歴史的條件のかわりに空想的な條件が、プロレタリアートがしだいに(自然発生的に)階級に組織されてゆく過程のかわりに各自の考え出した社会組織があらわれる。未来の世界史は、彼らにとっては、要するに彼らの社会案を宣伝し実行するにある」(15, p. 526)。よろしい、この指摘はまったく正しい。未成熟な現実とユートピア的解決が表裏することは疑いない。だがしかし、いやしくも実証的方法と歴史的方法を奉じているサン・シモンが、彼なりの事実認識に基づいて社会計画を構想したことも疑いない。彼は階級関係をどう認識したか。この点は彼の変動分析の手法を知るうえで必要である。

サン・シモンによれば、〈産業者〉industrielsとは「社会の種々の成員の物質的需要あるいは好みを満足させる一つあるいはいくつかの物的手段を生産し、あるいはこれを彼らのもとにとどけるために働く人」(8, p. 3)であって、農業、製造業、商業の全従事者、いかえれば、独立小生産者、商工業ブルジョワジー(銀行家・工場主・商人など)、プロレタリアートのすべてが明確に分離されないままでそこに含まれているのである。この産業者の階級が産業体系下では第一等の位置をしめるはずだと考えられる根拠は、(1)他の階級の没落に反して、産業階級はふだんに重大性を獲得してきたこと、(2)人間がつねに目ざしてきた目的は、もっとも有用な仕事に従う階級がもっとも尊重される社会秩序の樹立にあったということ、そして、(3)労働はあらゆる徳行の源であり、もっとも尊重されるべき有用労働を行う階級がとうぜん第一等の役割を果たすこと、それゆえ、ついには(4)管理的行為は必ず軍事的行為に優越するにいたること、であった。これは産業階級のたどる必然の運命である(*ibid.*, p. 19)。サン・シモンは、どんな社会でも、そこになんらかの原理によるイェラルシーが存在することを認めていたので、社会がピラミッドとして構成されることに異論は唱えなかったが、現実には彼が理解した過渡期の——つまりブルボン復古期の——階級構成は、つぎのようなものとして描かれている。すなわち、1) 基

層は日常の同じ仕事に従事する労働者(花崗岩)。

2) その上は産業の首長、製造法を改良し応用をひろげる科学者、全生産物に bon goût を与える芸術家(有用な貴金属)。そして1と2をあわせて広義の生産者と彼は規定した。3) 上層としては法曹、新旧貴族、有閑富者、官僚群(金メッキの石膏)。この層は封建的特権身分と、革命の過程で特権化してゆく第三身分の一部分とからなる。そして、頂点には、4) 王位(ダイヤモンド)。

ここでわれわれはサン・シモンの寓話として知られているものを思い出す。彼によれば、もしフランスが突如として科学者・芸術家・技術者、銀行家・企業家、農夫、製造者、職人の最上の部分をほんのごく少数だけ失ったとすれば、フランスはたちまち少くとも一世代間は死物と化すだろう。なぜならば、彼らこそ生産を通じて繁栄に貢献するところの本質的生産者であって、社会に直接に貢献し、不可欠でとりかえのきかぬ人びとだからである。社会の精華である。それにひきかえて、王弟、貴族、将軍、重臣、高級下級の官吏、各階級の僧侶、裁判官などのすべて、それに加えて貴族スタイルの大有産者一万人とが消えたとしても、彼らに同情の念は禁じえないとしても、そのことで政治的悪影響はなんら起るまい。なぜならば、彼らの空位はたやすく満たされるし、そのうえ、彼らは社会に対してせいぜい間接にしか役立たず、むしろ有害であるからだ。彼らは有閑寄食の非生産者であり、まったく生産者に対立している(6, pp. 17-26)。かたや、社会に直接貢献する不可欠、代替不能の生産者、かたや、社会にとって無用、有害で代替可能な非生産者。対立する両者の勝負は、おそかれはやかれ、はっきりするであろう。

これまで述べてきたところから、サン・シモンの考えている移行期の変動分析の輪廓がかなりはっきりする。

究極においては、古典力学のモデルが社会の把握に望ましいと考えながら、彼は、社会の構成諸部分が全体の運動に対しておこなう機能上の貢献度と規則性のいかんによって、社会は安定化と不安定化とを交互にして変動する、とみていた。この変動は、歴史的には、観念進歩の法則で貫かれ

たものであった。しかし、それはコンドルセ流の進歩史観とも、またヘーゲル流の絶対観念論ともちがっている。人類史の決定的発展要因は、物質でなく観念だとみた限りでは、サン・シモンは逆立ちしたマルクスであつたけれども、彼のいう観念の至上法則とは、ある観念を統合原理としてもつ社会体系が、その観念にもっとも適わしい最有力の階級の貢献をまってはじめて存在しようということ、そして、先行の社会体系の内部からのみかかる観念と階級が出現しようということ、を意味している。彼が、制度は観念の適用だといふばあい、それは観念と社会統合の関係をさしており実証的段階においては、科学的予見によって社会の向うべき途を明示して混乱を平和的に解決するために、とりわけ、計画性という契機において観念が適用されるほかはない、ということなのである。そして、サン・シモンの寓話がよく語っているように、新しい観念の眞の担い手として、社会ぜんたいに直接貢献する不可欠・代替不能の階級が、せいぜいのところ間接に貢献するか、まったく無用・有害であるところの代替可能な階級にかわって、第一等の位置にたつとき、危機は終熄する。ふるい観念をになう階級は、一部はまったく解体し、一部は変質順応し、一部は従属的位置へ転落することになる。こうして、新しい階級の新しい観念が、社会の組織原理になりうるとき、はじめて社会は確とした均衡に達しようのである。以上のような筋道で、サン・シモンの実証主義の方法と歴史主義の方法とが、変動分析のなかで結びつけられ、その実践形態として、組織計画の哲学が存在しえたわけである。彼自身、体系的にそう述べたわけでないが、ばらばらの論述を組み立てれば、このような模様になるのである。だがしかし、彼の死後には二つの方法は分岐し対立さえみせはじめ⁴⁾。

産業体系への具体的移行措置はどうか。

この点でのサン・シモンの考えは荒唐無稽である。暴動は破壊手段としては有効だが、建設手段としては無効であり、ほんらい平和的な産業者にとっては、論議・証明・説得という平和的方法があるのみだ、と彼は力説した。これは、マルクスが空想社会主義に共通の手口として指摘する特徴

である。さて、説得のうえで、国民の25分の24を占める数と世論をたよりに、全産業者の署名で請願書を王座にさしだす。その内容は、最重要の産業者に公共財産管理を委託させるというもので、王は勅令により〈産業君主制〉を宣布するという段取りである。そこでは王は第一の産業者となる。だが、ときどき誤解されるように、サン・シモンが君主主義者だったなどと思つてはいけない。「王は、貧者の道徳的・物質的状態の改善のために、王権によって、富者を寄与せしむべきでもしそうでなければ君主制の正当性はない」(12, p. 110) のであり、産業君主制の王位は公共性のシンボルとみるべきものであった。

移行問題は、学問的にも戦術的にも、つねにむずかしい。空想社会主義をやつつけたマルクス主義の移行論にも、かなりあいまいな点が残されている⁵⁾。移行問題はのちの機会に再検討するとして、さきを急いで、組織の哲学の実質内容である industrialisme に移らねばならない。

注 5) S. ムーア、城塚登訳『三つの戦術』1964。(岩波書店)では、マルクス理論に三つのちがった移行パターンが混在していることが指摘されている。1. 少数者→永続革命パターン(権力掌握→社会変革→多数者獲得)、2. 増大する窮乏化→多数者革命パターン(多数者獲得→権力掌握→社会変革)、3. 競争諸体系→改良志向パターン(社会変革→多数者獲得→権力掌握)が区別される。サン・シモンは、もちろん、どれとも異なるが、しいていえば、〈増大する貢献〉パターンという形になるだろう。多数者獲得→管理権掌握→社会変革ということになる。バブーフの〈平等者の陰謀〉はもちろん1のパターンの代表例であるが、バブーフと同時代の同郷人だったサン・シモンが「労働権の思想」以外に彼から影響を受けたと思われるものはなにもない。

IV 産業主義における生産の論理

第一作『ジュネーヴ人の手紙』で、サン・シモンはすでに、「万人は労働せん。万人はみずから一つの工場に結びついた労働者とみなすにいたろう」(1, p. 55) と誌した。あとうかぎり人間に有利に自然を変えるために、自然に働きかけることは、自治コンミュン形成以来の産業者にとって最大の課題であった。この世での生存に不可欠

な社会的有用物の生産、そして、かかる生産物を社会ぜんたいに拡大することは、すべての改革のめやすであったから、全社会生活がこの共通目標にむかうときにのみ、社会の危機は真に解決されよう。人が人を支配するだけの組織にかわって、人が物を支配する組織が活動するときに、いいかえれば、社会全体が産業化されて一つの巨大生産体として構成されるときにのみ、真の社会結合が可能になる。

かくして産業主義のエッセンスの一面は、つぎのように表明される。

「すべての思考と努力をひく唯一の目標は、産業にもっとも好適な組織である。ここで産業とは最広義の意味であって、理論的ならびに応用的な、精神的ならびに肉体的な、全ジャンル⁷の有用労働を包含する。産業に最適な組織とは、もはや政治権力がよけいな活動や強制を行わず、有用労働が攪乱されないように必要な妨止措置を講ずるだけの統治形態であり、労働者が結合して真の社会を形成し、彼らの様ざまな労働の生産物を、直接にかつまた自由をもって、交換しうるように、万事安排された統治形態である。ついにはかかる組織において、ひとり生産者の形成する真の社会のみが、自己に適するもの・自己が欲するもの・好むものを知ることができ、労働の功績と効用の唯一の判定者になるであろう (5, vol. 18, pp. 165, 166) そして「有用物の生産は、政治社会がみずから提起しうる唯一の理性的・実証的目標となる」(ibid., p. 186) のである⁸。

この目標にてらして、産業体系では経済的インタレストが中心の役割をはたすことは争えない。「この種のインタレストは、万人が理解しあい同意すべき唯一のものであり、万人が熟慮し共同で活動すべき唯一のものである。また、それをめぐって政治が行われ、制度および社会の問題すべてを批判するさいの独自の基準として受けとらるべき唯一のものである」(ibid., p. 188)。産業体系では経済的インタレストはすぐれて社会的なものである。このような経済的インタレストを基盤に、人びとは生産アソシアシオンに組織されるわけであるが、もちろん、生産それ自体が究極目的ではない。それは社会全体の一般的福祉の増大と、社

会成員個この実質的享受の増大のための手段である。そのために一層、生産という具体的な中心目標が強調されねばならない。

だが、さらにサン・シモンが、社会的平和にいたる途は、あらゆる制約からの経済的欲求の解放とその充足にある、と力説するところまでくとデュルケムは危惧の念を示さざるをえない。欲求はある水準にコントロールされた状態ではじめて正常だと考えるデュルケムが、社会的拘束の意義を認めない行き過ぎた見解に不満を表するのは当然かもしれない (13, pp. 240-244)。しかし、サンシモン自身は、個人のインタレストが自動的に一般のインタレストに合致するとは思ってもいかなかったし、新しい現世倫理の必要を、のちになるほど、痛感してもいた。万人を孤立にむかわせるエゴイズムと道徳的無秩序をおしとどめるには、「人びとと一般のなかに、社会的交わりの深い習慣と、最大の関心共同体の感情を生ぜしめる」(7, vol. 22, p. 52) 必要があった。ただし、産業体系における道徳は超越的なものではなくて、あくまでも〈この世的・実証的道徳〉le morale terrestre et positive なのである。経済倫理的で開明的なものである。それは軍事的美徳でも禁欲主義でもありえない。このような産業主義道徳をささえる宗教原理は、『新キリスト教』では、「人びとは互いに兄弟として交わらねばならない」として提示された。そして「宗教は、もっとも貧しい階級の状態を、能うかぎり速かに改善するという偉大な目的にむかって、社会を導かねばならない」(12, p. 87) と考えられたのである。一言でいえば産業の博愛主義化にほかならない⁹。全体としてみれば、デュルケムの考えに対して、サン・シモンの道徳・現世倫理はいちじるしく解放的性格のつよいものであり、それは、まだブルジョワ階級とプロレタリアートの対立が不明確な、当時の産業者イデオロギーと完全に対応するものだったといえよう。

さて、以上のべてきたところからだけ見れば、サン・シモンの思想は経済自由主義と異なるところはない。スミスやセイの経済学から深く影響された彼が、経済的インタレストと生産を力説し、国家権力の極小化を強調し、現世的産業道徳をさ

けぶとき、あきらかにサン・シモンは経済自由主義者として登場しているようだ(注6)をみよ)。彼がスミスやセイを完成しただけだ、とか、社会主義思想は彼の学説細部のみであって原理にはない、といった評価が出てくるのはこのためである。たしかに彼は「社会主義」という言葉を知らなかった⁸⁾。しかしながら、レセ・フェールの経済学者が、経済的インタレストは社会的なものでありながら、私事として扱われるべきものと考えたのに対して、サン・シモンや後の社会主義者は、経済的要因が共同生活の実質であるから、それは社会的に組織されるべきだと主張するのである。個人利益と一般利益が自動的に合致しないと考えるからこそ、道徳の必要性がそれだけ強調されるのである。

およそ、増大する分業に依存する産業体系において、構成諸部分が規則ただしく全体の運動に貢献して、統合された活動を営むためには、社会的有用物の生産という目標の設定、経済的インタレストの解放と充足、現世倫理の貫徹とともに、それらを具体的に媒介する管理ということが問題になるはずだ。分業によって多様化した労働に従事する多様な人びとが、巨大生産アソシアシオンに組織されるのは、なんらかの形の管理機関をつうじてであろう。

サン・シモンは遺稿の中でつぎのように書きのこした。「大多数の人口の道徳的・物質的改善を行うにもっとも直接の手段は、全適格者に労働を得さしめ〔一般的労働権とその義務〕、彼らの物質的生存を確実にするに必要な支出を、そしてまたプロレタリア階級の中にできるだけ速かに実証的知識を拡大するための支出を、さらに、この階級の人びとに知性発達にふさわしい娯楽を保障するための支出とを、国家支出で優先させることである。」このへんですでに経済自由主義の響はきこえてこなくなっているが、さらに彼は続けていう、「そのうえに、公共財産が管理に最高の能力を有し、よき管理に最大のインタレストを有する人びとによって、すなわち、最重要の産業者によって管理されるに必要な手段が加わる」(10, p. 128)。これではっきりするだろう。サン・シモンの産業主義にみられた経済自由主義的な半面は、計画経

済的な管理によって、他の半面にむけられるのである。この思想の中には、古典的社会主義の原型とともに、さらには現代における一連の社会管理主義のラフな原型がみられる。

われわれはすでに次節の問題に入っているが、そこに移るまえに、橋渡しとして、所有権と階級構成について言及しておこう。

「財産の保有は政治の大目標である。有産者が無産者に対して置きうる唯一の垣根は、道徳体系である」(5, vol. 18, p. 221)とサン・シモンは書いた。この言葉はわかりにくくて誤解を招きやすい。はじめ、彼は開明性 *lumières* や実証的知識の大小によって、人びとはランクされると考えて、学者→有産者→無産者の順序で階級構成をみていた(『ジュネーヴ人の手紙』)。「一般的利益にとって、支配する力は開明性に比例して割当される」(*ibid.*, p. 41)から、それゆえに無産者は有産者に服従するのである。上下関係はたんに財産の多寡によるものではないと考えられた。しかも、道徳体系では *lumières* は中核を占めるのだから、この意味で読みかえれば、先の引用文の含みははっきりするだろう。サン・シモンは所有権を尊重するが、不可侵のものとして擁護はしない。逆に所有の正当性は労働と効用性と使用能力にもとづくべきだと考えていた。世襲財産による非生産的な不労所得者をはげしく攻撃するのは、このためだった。かくして、「所有権は、それを生産にもっとも好適ならしめうる基礎の上で再構成されねばならない」(6, p. 59)のである。だが、彼は分配的正義によって所有関係を社会化しようなどとは考えていなかった。

初期には、上述のように、社会の進歩に貢献する開明性のもち分の大ききで、階級構成をみていた。いわば〈開明的貢献度〉によってみていた。しかし、晩年の『産業者教義問答』第四部では、産業主義の徹底によって、かなりちがった見解が示されている。階級間の相互依存度を加味した〈生産的貢献度〉にもとづいて、ランキングが行われるのである。彼はいう、「学者は産業者階級に非常に重要なサービスを行うが、前者は後者から生存そのものを支えられている。……産業者階級は *class fondamentale* であり、それなしに他

のいずれの階級も存続しえないところの、全社会の扶養階級である」(8, vol.39, p. 25)。互惠関係における自律性と依存性、不可欠性と可欠性、代替不能性と代替可能性などの関連において、相互依存における貢献度が明らかにされよう。学者は不可欠で代替不可能ではあっても、依存性において高いから、産業者階級に対して class secondaire の位置をしめる。芸術家は生産に関係するばかりでなく、現世倫理の感情を育成する役割をもち、サン・シモンによって、産業者階級に含められたり、それと学者の中間に位置づけられたりしている。全体の序列構成としては、開明的=生産的貢献の能力イェラルシーからみても、かつまた、「各人はその能力に応じて職業をとり、各能力はその労働に応じて報酬をうる」という原理からみても、産業体系においては、上から最重要の産業指導者(なかでも銀行家と産業資本家)、つぎに学者、芸術家、そして一般生産労働者、といった構成をとるとみるべきである。旧特権階級は遺制的ないし従属的であって、統制と監視のもとに存在すると考えられる。

このような階級構成の考え方は、なにゆえにサン・シモンがマルクスのように、一步すすめてプロレタリアートの究極的勝利を予測しなかったかを説明してもいる。「階級対立の未成熟な段階」といった正当だが紋切型の事実や、所有の社会化という考え方が欠けているという事実、そして、なによりも、サン・シモンが開明的=生産的貢献を軸にしたエリート管理を考えていたという事実がそれである。

注 6) この引用文はアダム・スミスのものだといっても、そっくり通用するだろう。じつ『産業論』1816—18を書いたころのサン・シモンは、純粋な経済自由主義にもっとも近づいていた。しかし、自由主義的な助手チェリーとの喧嘩別れ、1821年における出版パトロンの銀行家たちとの争いの後に、彼はその見解を変えていった。

7) 宗教は知的エリートには不要のもので、ただ人民に対する政治的必要物として意義がある、とサン・シモンは考えていたようである。しかし、サン・シモニアン達にとって、『新キリスト教』は聖書になった。

8) 社会主義という言葉は、彼の没後3年にして、1828年オーウェン派によってはじめて使用された。サン・シモンと社会主義を意図的に結びつけ

たのは、彼の弟子たちである。

V 産業主義における管理の論理

ますます増大してゆく分業を産業主義の原理によって、具体的に統合するには、なんらかの管理機関がなければならない。社会は管理する者とされる者とに二分される。前節でのべた階級構成にてらしていえば、管理の任にあたるものは代表エリートをおいてはない。「精神的権力は学者の手に、世俗的権力は有産者の手に、そして、人類を指導する者の指名権は万人の手に」(1, p. 47)とサン・シモンはつとに叫んでいた。銀行家や企業指導者などの最重要な産業家、学者、芸術家が、選ばれて機関を構成する。旧特権階級はもはやそこに参加することは許されない。こうして、いまや巨大生産アソシアシオンは有能な管理機関に服することになる。しかし、サン・シモンは統一の形態で経済の社会化をもくろんだのではない。彼の所有権思想がしめしているように、産業の開発は個人的企業で行われるものであり、それゆえに諸生産が計画的に管理さるべきだったのである。生産アソシアシオンはスーパーな生産有機体ではないことに注意しなければならない。

いうまでもなく、実証的・産業的体系では、科学や技術と産業は密接している。学問の自律性は尊重されるにしても、ここでは実証的知識はたんに個人の好奇心の対象ではなくて、産業への応用機能から捉えられるものである。理論と実践に対応する二つの主要な会議 conseil——産業者会議と学者会議——は、自律しつつも不可分の交渉をもって、管理機関を構成することになる。サン・シモンの考えでは、両者は平等ではなく、産業者会議のほうが優位にたつ。なぜなら、産業者会議はポリシーの執行をめぐる、究極的にはすべてを決定するものだからである。そして、学者会議は、こんにちの用語でいえば、スタッフ機能を果すべきものと考えられていた。

管理機関の組織の組みかたについて、サン・シモンは相互に若干のくいちがいをみせる提案をいくつも試みている。なかでもユートピア的に完成されている点では、つぎの三院制議会のプランが

見本になるかもしれない。1. 企画院 *Chambre d'invention* —— 技術者と芸術家からなり、公共労働と祝祭の年間企画をおこなう。2. 審査院 *Cham. d'examen* —— 科学者のみからなり、諸企画を審査し教育を統制する。3. 執行院 *Cham. d'exécution* —— 全部門の産業指導者からなり、認定された企画を遂行し予算を統制する、といった調子のものである (6, pp. 50-61)。彼の諸提案はそれぞれにおもしろく、示唆にも富んでいるが、コートピア的で、それゆえ、なにほどこか見戯に類しているのです、ここで立ち入る必要はあるまい。われわれにとっては、彼の管理の論理が問題である。要するに、サン・シモンの見解によれば、社会は重要産業者と学者などの代表エリートよりなる機関によって管理さるべきで、産業指導者がライン的な機能を、学者その他はスタッフ的機能を営むということである。これは〈専門能力にもとづく管理〉にほかならない。ウェーバーの専門家支配という論議にさきがけて、近代組織において専門技能がはたす決定的役割に注目した最初の見解であったといつてよい。

それでは、産業体系において、国家統治の問題はどうなるのか。国民が巨大生産アソシアシオンに組織されるにつれて、国家はそこに吸収されてゆくだろう。政府の機能はついに公共秩序の維持という狭い範囲に縮小される。これは夜警国家観に通ずる思想であるが、しかし、政府とは独立に確固たる管理機関が存在するという点で、夜警国家観ともアナーキズムとも異なるのである。もちろん、国家機関を抑圧の暴力装置とみる思想とも異なる。サン・シモンの考えでは、管理機関は政府から独立して、しかもその上位に位置するのである。ここで一つの疑問が生ずる。管理機関は政府と同じものにならないかということだ。名前がちがうだけではないか。

これに対して彼は否と答える。その理由は、エンゲルスがうまく要約しているように、「人間に対する政治的支配が、事物の管理と生産諸過程の指導に転化してゆくということ、だから、……国家の廃止ということは、ここですでに明言されているのである」(16, p. 444)。一般に政治的支配は人が人に対して権力を行使するところにある。こ

れに対し、産業体系での管理は、各分野の最有能の人びとによる事物の管理であり、その限りでのまた、それに即して人の管理を意味する。管理する者は所与の秩序を強制するのではない。種々の情報に基づいて、なにが適切であり、なにがそうでないかを、つまり、真理を知らしめることによって、管理される者の自発的服従をうるのである。そして、かかる管理の正当性は、ある原理に突極の根拠をもつ。「ふるい体系では社会は本質的に人間によって統治された。新しい体系ではただ原理によってのみ統治される」(6, p. 197)。この指摘はきわめて重大である。管理——ウェーバー流に支配といつてもよい——の正当性根拠は、なによりもまず、非人格的原理であり、その歴史主義的かつ実証主義的規定としての産業主義の原理にほかならない。そして、その現実的根拠として、専門能力と代表性とがあるのである。なぜサン・シモンが *lumières* の流布増大を力説したか、その有力な一因がここにもあったとみてよい。

では、管理の正当性に呼応する利害状態はなにか。それは、一方では、能力本位の貢献＝報賞のイエラルシクな均衡にある。他方では、公共利益と特殊利益を媒介する管理過程そのものを通じて期待される諸利益の統合にある、と考えてよからう。サン・シモンの管理の論理はきわめてダイナミックであって、原理や能力というそれ自体としてはスタティックな契機だけで支持されるのでは勿論ない。たとえば『欧州社会再組織論』1814ではつぎのような見解が示されている。すなわち、科学的方法を政治に適用するばあい、*à priori* な総合と *à posteriori* な分析という二つ一組の過程に即応して、一般利益と特殊利益は相互循環して解決さるべきだ、と彼は考えた。そこで、国民の公共利益の見地から考えてゆく〈一般利益の権力〉と、成員個この特殊利益の見地からする〈特殊的・地方的利益の権力〉を平等におき、両者を最適度のバランスに媒介するための〈規制的・媒介の権力〉を構想した (4, pp. 39-42)。異方向の社会諸力の均衡まち自動調整論といったものではなくて、はっきりと作為性をもつ媒介物を設定するという方法である。こうした方法は産業体系の管

理機関の編成にも、プランとして適用されている。

およそ管理は、ひろい意味で政治学の対象であろう。サン・シモンにとって、政治学とはひとえに「《la science de la production》、すなわち、全ジアンルの生産にもっとも好適な事物の秩序を対象とする科学」(5, vol.18, p. 188)なのであった。生産にもとづく秩序の科学にほかならない。そして、そのもの自体としては未だ抽象的であるにすぎない生産と秩序を、生活諸領域のなかへ具体的に実現してゆくプロセスが、すなわち、管理なのである。これが管理のすべてである。現代管理学の源流にサン・シモンが立っていることは明白である。

サン・シモンの管理の論理に欠如しているものに注意しつつ、最後に、おおまかな問題点を一つだけ、中間結論として述べておきたい。

彼の組織計画の哲学と産業主義の底にもぐってゆくと、ひとつの重い観念が沈んでいることに気づく。それは《**raison d'Industrie**》である。国家理性にたいして、いわば産業理性と呼ぶべき観念である。産業の強化発展を至高の目的とし格率とする観念である。この産業理性は、生産と管理の論理に伸だちされて、組織計画の哲学と産業主義にその実現形態をみいだす。サン・シモンの思想に萌芽として含まれ、のちに分岐対立するにいたるものは、彼のこの *raison d'Industrie* の観念の中で融合していた。彼がこののっぴきならぬ観念にしばられていたことから、彼の理論に決定的に欠けているものが明瞭になってくる。

第一に、マルクスが執拗に追及していった〈資本の論理〉を抜きにした生産の論理だけでは、所有と階級の問題は、まさしく産業と管理という問題のなかへ未消化に吸収されてしまうだろう。1920～30年代において、サン・シモンの思想が、ロシア社会主義によりも、アメリカのテクノクラシーに遺伝するのは、このためである。第二に、ナショナルな政治目標を基準に諸階級の値打ちをはかったウェーバーが学問的に禁欲はしたけれども、彼の支配社会学の底に *raison d'État* を置くのに対して、サン・シモンではこの格率がま

ったく欠如していた。彼においては、国家、権力総じて支配構造がたんに遺制として扱われ、それらは管理機関へと転化されてしまった。産業理性は、その本性上、コスモポリタンなものである。国家理性抜きに産業理性は、彼のなかで、産業的繁栄と平和のコスモポリタニズムをいよいよ膨脹させてしまった⁹⁾。そして、第三に、彼が道徳による統合を軽視したというデュルケムの批判は、いくらかはずれているところもあるが、しかし、外在的・拘束的な社会事実としての道徳の理論的位置づけが欠如しているというなら、その指摘はただしい。サン・シモンの現世的・実証的道徳の位置づけは、ウェーバーにおけるエトスのそれに近いものであった。ただ、前者が計画としてのあるべきものを強調したのに対して、後者はあるものを理解したという差異はあるけれども。所詮、道徳体系はサン・シモンにとって産業理性のお供なのであった。

以上の欠如はとうぜん生ずべくして生じたものである。ところが、それらの欠如によって、〈産業理性——生産と管理の論理——組織計画の哲学と産業主義〉というサン・シモンの図式は、驚くほど、ほとんどそっくり、現在のある種の《インダストリアリズム》論にリヴァイヴァルしている。現在のこれら諸理論は、サン・シモン同様に、上記の三つの問題点を欠如しているか、ないしは、20世紀社会の形態転化によって、上記三点についてのウェイトの置きどころを変えねばならないとの事実認識にもとづくか、いずれの場合にしろ、基本線においては共通しているのである。ちなみに、C・カー他『インダストリアリズム』という書物を開いてみよう。彼らの主張する「新見解」の標識は、1. 資本主義よりも産業化という捉えかた、2. 熟練と責任の度合いの上昇、3. 技術者や経営管理者の比率の増大、4. 新しい富と余暇、5. 労働者の公然たる抗議の衰退、6. 企業者のいっそう大きな役割、7. 遍在する国家、つまり規整機能としての政府の役割の拡大、8. 管理する者とされる者との永遠の階級、9. それぞれの社会独自の産業化の途、10. 社会内の利益の多様化による多元的インダストリアリズム、などである (18, pp. 32-36)。たしかに

ここには一世紀半相当の変化は認められる。だが、たとえば、ここで指摘される国家や政府の観念はサン・シモンの管理機関のそれに非常にちか。理論的には、ほとんどの諸点は彼の思想から直接にひきだせる結論だといってよい。現在 *raison d'Industrie* の見地からだけ評価すれば、サン・シモンの産業主義が古典的社会主義の原型であっただけでなく、いやむしろ、それを超えてしまっ、20世紀の社会管理主義のかなりリアルな原型になりえた、と断定することは誇大な歪曲ではあるまい。一応ここでは問題提だけしておくたい。

組織論史の一発目にサン・シモンを選んだところ、かなりたくさんの問題がでてきたようである。紙幅の都合で、結論を最終要約しないで、行論の随所に書きおとしたままになった。問題発見史としての性質上、それらは続編のために残しておくたい。

注 9) 彼の思想中、コスモポリタニズムは重要な位置をしめる。本稿では略したが、彼の国際政治組織論は完全に現代に通用しうる性質のものである。また、彼が中世を評価した一因は、中世文明が教育された僧侶によるコスモポリタンな *papal* 管理組織をもっていた、ということであった。

<付記> 本稿で書き残した諸問題もふくめて、別の角度からみたサン・シモン論を『日本労働協会雑誌』にちかく発表する予定。

サン・シモン主要著作 (1~12) と他の参考文献。なおサン・シモンの邦訳・英訳が明示されている場合には、そこから引用した。

1. *Lettres d'un habitant de Genève*, 1803, Oeuvres complètes de Saint-Simon et Infantin, Paris, 1865—76, Vol. 15 (全集は以下 O. C. と略記)
2. *Introduction aux travaux scientifiques du XIX^e siècle*, 1807—8, Oeuvres choisies de Saint-Simon, ed., Lemonnier, Brussels, 1859.
3. *Mémoire sur la science de l'homme*, 1813, O. C., Vol. 40.
4. *De la réorganisation de la société européenne*, 1818, O. C., Vol. 15. (Markham ed., *Saint-Simon, Selected Writings*, 1952)
5. *L'Industrie*, 1816—18, O. C., Vol. 18, 19.
6. *L'Organisateur*, 1819—20, O. C., Vol. 20.
7. *Du système industriel*, 1821—22, O. C., Vol. 21—23.
8. *Catéchisme des industriels*, 1823—24, O. C., Vol. 37—39. (高木暢哉訳「産業の政治的教義問答」, 「世界大思想全集」第10巻, 河出書房新社。この訳は四部中の第一, 二部のみ)
9. *Quelques opinion philosophiques*, 1825, O. C., Vol. 39.
10. *De l'organisation sociale*, 1825, O. C., Vol. 39.
11. *De physiologie sociale*, 1825, O. C., Vol. 38.
12. *Nouveau Christianisme*, 1825, O. C., Vol. 23. (Markham ed., *Saint-Simon, Selected Writings*, 1952)
13. E. Durkheim, *Socialism*, 1962.
14. F. Markham, *Introduction to Saint-Simon, Selected Writings*, 1952.
15. マルクス=エンゲルス「共産党宣言」, マル・エン選集, 第2巻, 大月書店。
16. エンゲルス「反デューリング論」および「空想から科学へ」, マル・エン選集, 第14巻, 大月書店。
17. 田中清助「人間・労働・体制」[現代社会学講座 I, 体制の社会学] 1964, 有斐閣。
18. カー, ダンロップ, ハービソン, マイヤーズ「インダストリアリズム」川田寿他訳, 1963, 東洋経済新報社。